

赤澤林太郎「今市におけるフィールドホッケー競技の現状とこれからの課題」

1. はじめに

昨年夏、北京でオリンピックが開催された。栃木県内のプロスポーツ界が発展し、報道などで注目を浴びるなか、このアマチュアスポーツの祭典でも栃木の選手が活躍していたことは県内でもあまり知られていない。そのなかでもフィールドホッケー競技では栃木県から3人もの選手が出場し、ゴールを上げて勝利に貢献するなど活躍を見せた¹。しかし、テレビや新聞で取り上げられるのは大会期間中のみであり、世界的に普及しているホッケーであるが、国内においてはマイナースポーツとして扱われてしまっている。

私自身も、小学生だった頃に入りたかったフィールドホッケー部が廃部になり、他のスポーツをせざるを得なくなった経緯を持っている。当時、10歳にも満たない児童であったが、今でもこのことが残念で深く心に残っている。もともとスポーツ観戦が趣味だった私は最近になり、地元で活動をしているこの競技を観るようになった。すると、会場に足を運んでみるうちに、ホッケーの世界には想像を超えた驚くべき事実がいくつもあることが分かった。

今回は、栃木県の旧今市市でフィールドホッケーが広まっていった経緯と、現存するトップチームとそれを取り巻く現状、そして競技普及に向けた今後の課題について、インタビューとフィールド調査からレポートする。

2. フィールドホッケーとは

まず、フィールドホッケー（以下、ホッケーと略す）という競技について簡単に説明をする。ホッケーは、イギリスで生まれ、野球と同様にクリケットというスポーツから派生していった。競技場の大きさはサッカーとほぼ同じくらいで、アイスホッケーに似たようなスティックを使って、ゴルフボール並みに硬い球を打ち、ゴールに入れる競技である²。

日本には1906年にイギリス人の牧師によって伝えられ、1932年にはロサンゼルス五輪で銀メダルを獲得している。これは日本団体球技史上初の快挙であった。しかし、その年以降はルール改正や人工芝導入など競技そのものが劇的に変化し国内では伸び悩みが続いている。これがマイナーなスポーツと化してしまった要因と考えられる³。

3 . 国体を契機に県内に広まったホッケー

次に、県内でホッケーが広まっていった経緯を見てゆくことにする。栃木では1980年に国体が開催され、私の出身地である旧今市市（現日光市）がホッケー競技を受け持った。このため、県内のホッケーのメッカとされ地元の人に愛されている。当時は子供たち憧れのスポーツで人気もあったが、これは昨今、国体で担当した今市市だけに限られたことである。それでは、なぜ今市市がホッケーを担当することになったのか。

国体の開催地は、まず各競技の立地条件に合うところが優先される。県内の例として、広大な面積を持つ渡良瀬遊水池がある、藤岡町にカーヌー競技が割り当てられたことが挙げられる。次に、以前から施設が充実し、その自治体で競技自体が普及しているところに、地元首長と県議の了承を得て当えられる。最後に、県内で全く普及していない競技を残っている自治体に、各県議を通じて決定する。

県内に全く普及されていなかったホッケー競技を開催するにあたり栃木県体育協会は、県議会議員を務めていた斉藤輝夫氏に依頼し、ホッケー協会を作ることになった。協会設立当時は、県議の中で斎藤氏と親交のあった議員の地元である佐野市で開催される予定であったが、直後に斎藤氏が今市市長に当選したため、今市市での開催に変更された⁴。

4 . 国体の成功で固まった地盤

全く無の状態から運営を任された今市市は、直ちに本大会に向けた強化を始めた。東京から関係者を招聘し、本大会で行われる4種目それぞれのチームを作った。成年男子は今市市役所、成年女子は日本グラクソ、少年の部は今市高校、今市工業高校である。いち早く天然芝の競技場を建設し、積極的に練習試合を組むなどの強化策が実り、全国での普及度が低いこともあるが、設立してから各チームとも好成績を収め本大会でも栃木は全種目を制覇し、国体を盛り上げることができた。

5 . 国体終了後の規模縮小化

しかし、国体を成功させるという大きな目標を達成したことにより、もともとその土地に馴染んでいなかった競技の多くは一般的に尻すぼみしてしまう傾向がある。例えば、栃

木国体の前後に行われた長野や宮崎、滋賀の各県には、社会人チームの中で現在トップディビジョンに所属するチームは存在しない。また、高校生以下のカテゴリーにおいても地方予選で敗退し全国大会に進めない県もある。

この現象は栃木においても見られ、男子社会人チームの今市市役所は他のクラブチームに吸収される形で廃部を余儀なくされている。やはり、各自治体の事後協力が得られない場合、高校など学校の部活動では補助されている存続は可能であるが、社会人のチームは存続が厳しくなっている現状である。

6. グラクソホッケーチームについて

そのなかで、栃木に社会人として現在もトップディビジョンで活躍を続けているチームがある。女子のグラクソ・スミスライン（以下、グラクソと略す）である。次に、グラクソホッケーチームの現状を見てゆくことにする。

グラクソは、イギリスに本社を、東京都渋谷に日本法人の支社を、今市に生産工場をそれぞれ構える、世界的に有名な製薬企業である。広告に社名を大きく出さず、風邪薬のコンタックや歯磨き粉のアクアフレッシュなど、商品名を中心に宣伝しているため一般的にはあまり馴染みがない。また、外資系企業のため合併を繰り返し行っていることもその理由のひとつであると考えられる⁵。

上でも挙げたように、グラクソホッケーチームは1976年、日本グラクソという名前で誕生した。栃木国体へ向けて、市や会社が全面協力し第1回実業団選手権で優勝。国体も制し、その後も1997年に始まった日本リーグにも第1回大会から参戦して、日本代表選手も数多く輩出するなど、現在も全国大会の常連となっている。

7. グラクソチームを取り巻く環境

しかし、グラクソチーム自体も他のクラブ同様、厳しい環境下におかれている。今市にある工場内に人工芝のグラウンドはなく、平日に練習できる週はたったの2回だけで、会社から距離ある「今市青少年スポーツセンター」のホッケー専用競技場を借りている。しかも、選手たちは定時まで勤務をしているため練習開始は日没後で、グラウンドに証明設備がないため、隣接する倉庫から自家発電のミニ照明を自ら何機も運び足元を照らす。練習後も飛び散った自前のボールを、最後の1つが見つかるまで探しそれからの帰宅となる。

マイナーな競技とはいえ、プロスポーツの世界では考えられない実態が僅かな練習時間の中で数多く浮かび上がる。

また、日本リーグが開幕した 1990 年代頃は、高校や大学を卒業してからグラクソに正社員として入り、ホッケーをしながら会社で業務をこなし、競技引退後も会社に残る選手が多くいた。しかし、現在は不況によるスポーツ業界の低迷により、各スポーツチームの中で契約制度を使う企業が出てきていて、グラクソもそのうちのひとつである。現在のグラクソの 17 選手全員が契約社員であり、引退してからは退社してしまう場合がほとんどである。そのため、今市工場内にチームをサポートするシステムが確立されておらず、地元での大会もいまいち盛り上がり欠けてしまっている。

8 . 存続させるためのチーム作り

会社が合併を繰り返す度に協力体制が変化し、その影響を直接受けてしまうグラクソチームであるが、廃部の危機を迎えたことはない。それは、設立当時の社長がホッケー競技に対し、前向きに興味を示してくれたことがあるが、それ以上に、沼尾健一監督の信念を持ったチーム作りが非常に大きな理由のひとつであると考えられる。

グラクソチームは、プロチームではないためホッケーだけに専念することはできない。日本リーグに参戦している他の社会人チームや大学チームと比べて練習量も限られてしまうので、五輪出場を目指す学生選手たちから敬遠されてしまうケースがある。そのなかで沼尾監督は、仕事とホッケーを両立し、自分で社会人として向上する選手の獲得を望んでいる。スタッフに管理されてプレーするよりも、厳しい環境の中で個性を生かしながら好きなホッケーをする方が、心身ともに成長すると考えられるため、実際にグラクソ入りを自ら望んだ選手は、他のチームの選手よりも長続きし選手生活を全うしている場合が多い。

また沼尾監督は、地方だけでなく地元今市の選手の獲得を強く望んでいる。そのために今市高校との練習試合を組んだり、地元開催のリーグ戦では小学生を招待したりして、試合後には試合後には子供たちにサインをしてあげたりするなど、地域への貢献を欠かさない⁶。

9 . 自治体の取り組み

では、グラクソチームと対にあたる自治体は、ホッケー普及のためどのような取り組み

をしているのか。市にとって、グラクソチームの存続は競技普及の絶対条件となるため連携を怠ることはしない。そのために、現日光市長の斎藤文夫氏は年に一度、渋谷のグラクソ本社を訪れホッケー部の協力をお願いしているほか、2011年を目安に青少年スポーツセンターの人工芝競技場を増設し、証明設備付きのグラウンドを市から提供する予定である。

さらに市は、グラクソに対する協力をしながら、少子化によるホッケー人口の減少を常に懸念している。現在、ホッケーの盛んな今市であっても、子どもたちはサッカーや野球のようなメジャースポーツをまず選択してしまう。また、防具を付けずに硬いボールを木製のスティックで扱うため、怪我を恐れて親に反対されるケースも少なくない。

また、ホッケーを教えられる人材の確保を急いでいる。小学生チームの場合、教員が直接指導することはまずない。むしろ経験の少ない学校の先生より、ホッケー経験者である生徒の保護者がコーチとしてチームを指揮するケースが多い。これはホッケーを教えることができる指導者が少ないことを意味している。教員の中には、経験者であっても高校や大学時代にブランクがあり、常にルールや戦術が変化するホッケーに対応できないからである。このケースは中学校ホッケー部の教員に多くみられる。

そして、体育科教員の採用人数の削減が影響し、ホッケーの上級者が学校教員として地元に戻ってくるのが限られてしまっていることが大きな原因ともなっている。これに伴い、協会はホッケー指導者の指導に現在力を入れている。カテゴリーに関係なく指導者を招集し定期的に講習会を行って、選手育成などを学ぶ機会を設けている⁷。

10. カテゴリーピラミッドの確立

栃木県は、学生のホッケー部に関して、いくつか複雑な事情を抱えている。そのうちの2つの事例を最後に紹介する。

県内の高校ホッケー部は、今市だけに限らず隣接する鹿沼市にも2つ存在する。これらはいずれも、今市高校現監督の山本氏が赴任していた当時に作ったチームであり、ホッケー競技の県内拡大に期待が寄せられた。しかし、もともとホッケー文化のない鹿沼市では、小中学校にチームがなく人工芝のグラウンドも存在しない。さらに、鹿沼の2つの高校は県内でも上位クラスの進学校であるため、今市の中学ホッケー部の生徒が将来のことを考えホッケー部のある鹿沼に通うケースがある。このため高校で戦力が分散するため全国大会での活躍が難しい現状でもある。

また栃木県には大学にホッケー部が存在しない。ホッケー強豪の他県ではいずれも大学にホッケーチームがあり、日本リーグで活躍しているところもある。市は小山の白鷗大学や、宇都宮の帝京大学に打診をしたが、グラウンドまでの距離などを理由に話し合いが進んでいない。

このように、小学校から、中学、高校、大学、そして社会人、あるいはクラブチームといった、カテゴリ別の「ピラミッド」が、栃木のホッケー界には確立されていない。このため、全国大会での活躍ができなくなったり、他県の大学に流出してしまったり、いわゆる生え抜きのトッププレーヤーを作ることができなくなっている。他県と対等に渡り合うようにするためには、まずは県内の大学にホッケー部を創設することが重要である。そうすれば、高校生に限らず若いカテゴリの選手達の目標にもなるはずである。

11. おわりに

先日、グラクソの試合を観戦した際、応援に来ていた今市高校の生徒たちと知り合った。翌週にインターハイの予選があると教えてくれ、気付いたら私は大会会場である埼玉まで車を走らせていた。どうせ小さな大会なのだろうと高を括り、グラクソが参戦している日本リーグ同様に静かなスタンドがあると想像していたが、選手たちの両親が自前で用意した応援グッズをスタンドいっぱいに広げて、我が子の活躍に一際大きな声援を送っていた。それはトップリーグとはまた一味違った独特の世界であった。

県ホッケー協会理事長の青木氏にインタビューした際、「将来、国体のときに活躍した選手が自分の子どもたち、今市でホッケーを続けてもらいたい。そういった形で恩返ししてくれれば嬉しい」と願望を語ってくれたことを思い出した。このときの客席に栃木国体の元選手がいたかは定かでない。ただ、この親子の関係を見ていて、子どもたちだけでなく、その親や地元のファンも一体になって「家族ぐるみ」で支えていかなければならない競技であることを感じた。

また、これからは地域の手も必要となる。現日光市は、ホッケーだけでなくアイスホッケーとスケートも盛んな地域である。夏場は陸のホッケー、冬は氷のホッケーというように、季節は違えども類似した競技同士で連携して、競技者とファンがひとつになれば共存してゆくことは可能である。インタビューを受けてくださった御三方も、最後のほうには他競技との連携を望んでいるとおっしゃっていた。他の自治体のような「総合型地域スポーツクラブ」の実現も不可能ではない。

そして、メディアの力も大いに使わなければならない。冒頭で述べたように、国際大会での地元選手の活躍は、地元マスコミを賑わすだけではなく、後輩たちへの刺激にもなる。ホッケーを始めてくれた子供たちへ、将来続けていても何不自由ないような環境を整備できるかにかかっている。

フィールドホッケーは、マイナースポーツの中でも取り分け人材が不足している競技である。それでも、私のようなファンが、例え未経験者であっても、ホッケーの素晴らしさを広め地道に普及していったら、マンパワー不足も自然と解消されるであろう。さらにそれと平行して、選手をサポートする家族や市民が、カテゴリーの枠を越えた手助けをして、地元とホッケーを愛してゆくことが、これからのホッケー界の課題であると思った。

註

¹ JOC「ホッケー日本選手団一覧」。

<http://www.joc.or.jp/beijing/sports/hockey.html>

² JHA 日本ホッケー協会「ホッケーとは」。

<http://www.hockey.or.jp/whats hockey/index.html>

³ JHA 日本ホッケー協会「ホッケーの歴史」。

<http://www.hockey.or.jp/whats hockey/history.html>

⁴ 6/12(金) 日光市体育協会会長、吉原氏電話インタビュー。

⁵ グラクソ・スミスクライン HP、企業情報「会社沿革」。(2009年6月現在)

<http://glaxosmithkline.co.jp/corp/history.html>

⁶ 6/18(木) グラクソ・スミスクラインフィールドホッケー部監督、沼尾健一氏インタビュー。

⁷ 5/30(土) 栃木県ホッケー協会理事、青木一明氏インタビュー。